

団地造成事業

—分布調査概報—

末広六道原遺跡

1978

末広六道原遺跡調査団
長野県企業局

団地造成事業

—分布調査概報—

末広六道原遺跡

1978

末広六道原遺跡調査団

長野県企業局

序

近年、住宅建築が急激化し、その前段階としての土地造成が各所で行なわれています。その度に貴重な埋蔵文化財が破壊されていく現状であります。

この度、伊那市美篠地区でも、このような姿が現実化してまいりました。該当地区は末広六道原遺跡として登録されてはいたが、諸条件により遺跡の存在性は希薄なものと考えられていたので、いきなり、本調査をする前に、分布調査を行なって、その状況によって、本調査を進める段落りとしました。分布調査を52年度末の3月上旬から中旬にかけて行ないました。その成果は期待していたよりも収穫があり、本調査を行なう運びとなった。

昭和53年3月17日

団長 友野良一

凡　　例

1. 今回の発掘調査は宅地造成事業で、緊急分布調査にもとづく概報とする。
2. この調査は、宅地造成事業に伴なう分布調査で、事業は長野県企業局の委託により実施した。
3. 本調査は、昭和52年度中に業務を終了する義務があるため、概報は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。

目 次

序

凡 例

目 次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 環 境	(1～2)
第1節 位 置	(1)
第2節 地形・地質	(2)
第3節 歴史的環境	(2)
第Ⅱ章 分布調査の経過	(3～5)
第1節 分布調査の経緯	(3)
第2節 調査の組織	(3)
第3節 分布調査日誌	(4～5)
第Ⅲ章 遺 物	(6)
第1節 土 器	(6)
第2節 石 器	(6)
第Ⅳ章 ま と め	(7)

挿図目次

第1図 地形および位置図 (1)

図版目次

- 図版1 遺跡地遠望 (南側より眺む)
- 図版2 遺跡地遠望 (東側より眺む)
- 図版3 六道地藏尊 (北側より眺む)
- 図版4 土器出土状況
- 図版5 石器出土状況
- 図版6 出土土器
- 図版7 出土石器
- 図版8 出土石器

第Ⅰ章 環 境

第1節 位 置

末広六道原遺跡は、長野県伊那市大字美篶下川手、末広両部落にわたって所在しています。遺跡地までの道順としては、二通り考えられる。天竜川に沿って南北に走る竜東線を箕輪町へ向って北上して上牧部落のすこし手前で交差点のある四角にぶつかる。この四角を右折し、段丘を登りつめると、市営住宅や県営住宅がマッチ箱のような姿で並んでいる。この住宅地帯より東へ200m程度行った道路の南側の森林地帯が遺跡地である。もう一方の道順は伊那市街より高速線を東へ約1km程度行き、適当に段丘崖につくられた道路を北側へ登りつめると、三峰川第一段丘面が広がっている。この段丘面は南北に500m程の規模をもっている。この段丘面をさらに北側へ行くと、第二段丘にぶつかる。この段丘面を登り切ると、広々とした第二段丘面が展開している。この段丘面でまず最初に目につくのは、伊那市営のゴミ焼却場の空高くそり立つ白い煙突、この目標のすぐ北側の森林地帯が遺跡となっている。前述した、森林地帯の中央部を東西に走っている道路は農業振興に役立つものとして、数年前に開通し、農免道路と呼ばれている。



第1図 地形および位置図

第2節 地形・地質

伊那谷は南北に走る二つの大きな山脈（西側は木曾山脈、東側は赤石山脈）にはさまれ、縱谷状地形の最低部に天竜川が北から南へ流れ、太平洋へと注いでいる。この両岸にはそれぞれ6段の段丘が発達している。遺跡地の段丘面は六道原段丘と呼ばれ、その内容について、上伊那郡誌「自然篇」によれば、「現河床から20m～30mの高さをもつ、六道原礫層の堆積面で、小坂田ロームと波田ロームとが風成でのってくるが、小坂田ロームと波田ロームに覆われている堆積段丘である。」「波田ローム層の産状は、最上位のローム層で、周辺山麓より低い最も広大な扇状地面（高位堆積面）の上にある。この場合大泉面（竜西段丘面）でも、卯の木面（竜東段丘面）においても、このローム層の直下の礫層とは整合である。また、交通段丘面の南殿段丘の本ローム層の下部と直下の礫層も整合である。」

「小坂田ローム層の産状は、大泉面、卯ノ木面上でわずかに重なっているが、一般に低地部では水成相を示し、高位では風成で、ときには下部のみ、多少、水の影響を受けている。手良面や荒神山面六道原面上では全部が風成である。下部の第1浮石帶は、下位の西林ロームの風化帯の上にきれいな境をもって重なっている。」以上、述べてきた諸条件のもとに、遺跡地は存在している。

第3節 歴史的環境

遺跡地より西方へ約1km程行くと、天竜川竜東段丘面があり、この段丘崖には福島古墳群、上牧古墳群、野底古墳と呼ばれているとおり、古墳の密集している地帯があり、これらをとりまくようにして、かの有名な福島の郷が存在している。南東の段丘面の中央部附近にぽっかりと木立が集中している個所がみられる。これが六道地蔵尊である。これについては由来を伊那市寺院誌によれば次のように記してある。『わが国に於ける六道地蔵の發祥は古く文徳天皇の仁寿2年（852）小野篁が京都伏見の大善寺に六地蔵を安置したのがはじまりと言われ、後、後白河天皇の保元2年（1157）平清盛がこれを諸国に分置したが、その時1体をこの信濃国笠原庄に堂宇を建てて安置したとも伝えられている。また一説には笠原の牧の牧監笠原平吾頼貞の墓とも言われる。縁日が旧暦の7月6日、7日と定められたのは、墓が京都5条にある珍藏寺に據て、冥途へ行って帰って来たというその日に因んだものであろう。』

現在は8月6日で、この日は近在から亡くなった人々の供養のために、善男善女がつめかけ、殊に新盆の家では必ずここに詣でて松のぼい（秀枝の意か）をもらい、これに仏を乗り移らせて帰り、仏壇に供えて盂蘭盆を待つ習慣になっている。』

また、遺跡地の近くでは戦時に飛行場をつくった所があり、さらに遺跡の松林のなかに飛行機の格納庫として利用された跡が生々しく残っていた。

（飯塚政美）

第Ⅱ章 分布調査の経過

第1節 分布調査の経緯

県企業局による美篠地区宅地造成事業は数年前より計画され、当時、県文化課櫛口指導主事と市教育委員会とで現地協議を行ない分布調査をして、遺跡の状態を確認したうえで、新めて発掘調査をするという計画をたてた。本年度になって用地買収もほぼ終了し、企業局では、本年夏頃には工事に着手したいという意向を出したために、調査にかかるまえに、県企業局職員が来伊して、綿密な打合せをした。

第2節 分布調査の組織

末広六道原遺跡 分布調査会

分布調査団

団長	友野 良一	日本考古学协会会员
副団長	根津 清志	長野県考古学会会员
タ	御子柴泰正	タ
調査員	飯塚 政美	タ
タ	田畠 長雄	タ
タ	福沢 幸一	タ
タ	荻原 茂	タ

第3節 分布調査

昭和53年3月6日 テント及び発掘に必要な器材を運搬する。テントを道路に面した松林の切り倒した場所がかなり広範囲平坦だったので、この地に2張りのテントを建てる。テント張りは午前中で終了したので、午後よりグリット掘りを開始する。南斜面の傾斜地のために南側に行く程深くなっていた。浅いところでは10cm位でロームに、深いところでは60cm位でローム層に達した。

本日は打製石斧1点の出土があった。

昭和53年3月8日 昨日同様にグリット掘りを西へ西へと拡張して、焼却場のすぐ近くの南傾斜面の松林の中にグリットを入れてみると傾斜面のために、大部分土が流れるとみえて、傾斜地の高いところは浅く、南側の低い部分は深くなっていた。この深さはローム層まで約1m程もあった。

昭和53年3月9日 本日は当初より大きな期待をもっていた。近くで、最も日当りがよく、遺跡が存在しそうな地区へ同様な方法でグリットを入れてみる。掘れども、掘れども遺物らしきものは全く出土せず、一同落胆する。この辺はかなりの傾斜地のために南側ではローム層面まで、およそ背丈程あり、あの安全性を考えて埋めておく。

昭和53年3月10日 本日は雨降りのために午前中は休みにしたが、午後は若干小やみになって来たので、グリット掘りを沢をへだてた北側の南傾斜面に入れてみる。遺物は数点石器が出土したのみであった。

昭和53年3月11日

二番目の沢の南傾斜面に多くのグリットを入れてみると、数点の石器の出土があったのみで、遺構らしきものは存在しなかった。それでも、どこかに遺構があるものと確信して丁寧にグリット掘りを最初とは反対に東へ向って掘っていく。

昭和53年3月13日

本日は何にも出土しないので、落胆していたところ、南傾斜面の中央部附近に多量の土器や石器の出土をみたので、その周囲を大幅に拡張していく。

遺物としては、縄文中期初頭、水神平式等であった。一方、同様にグリット掘りを、東へ東へと拡張していく。



発掘風景

昭和53年3月14日 昨日、多量の土器出土をみた周囲を大幅に拡張していき、その出土しそうな周囲をつきとめる。一方、グリット掘りを東へ東へと進めて行き、石器の出土した地点を把握する。本日までの段階でグリット数は2m²位のを600個程入れてみた。

昭和53年3月15日 本日で発掘作業終了。テントの移動を行なう。

昭和53年3月16日 県企業局より西沢調査計画係長、山田主事が来伊し、分布調査発掘現場を視察し、本調査について打合せをする。友野良一団長、教育委員会より竹松社会教育課長が出席する。

(飯塚政美)

〈発掘作業員〉

平沢 公夫、赤羽 幸寿、平沢 平治、赤羽 喜美、池上 大二、有賀鬼久雄、北原 一喜、
北原 清司、辰野みさ子、白鳥 异士、武田 久雄、後藤 重美、原 修一、竹内 美里、
登内 政光、半波 国雄、井口はる子、北野 美好、酒井 富江、山岸 久子、山岸 哲夫、
中山貴代子、登内 哲彦、酒井 宏美、工藤りよ子、高島 异、高島 信子、山岸志げみ、
宮下 徳雄、伊藤 浩美、伊沢みゆき、入江 共美、北原由美子、城倉 公一、宮下 理、
唐木 啓、春日 公明、春日 剛、(敬称略、順不同)

第Ⅲ章 遺物

第1節 土器 (図版6)

(1～4)は外面に細かな繩文を施してあるもの、(1～4)は明褐色、3は茶褐色を呈し、(1～2)は少量の長石、(4)は少量の雲母を含み、3は内面に擦痕を有する。(5～8)は外面に沈線を施してあるもの。(5)は沈線を縦位に、(6)は沈線を綾状に、(7)は沈線を縦位と斜日状にそれぞれ施してある。(5)は黒褐色、(6～7)は赤褐色、(8)は黄褐色を呈している。(5)は多量の長石を含み、良好、(6)は少量の長石を含み、焼成は良好、(7)は多量の雲母を、焼成は良好、(8)は少量の長石を含み、焼成は良好。

(9～18)は条痕を配してあるもの。その条痕は(9・10・13・18)は横位に、(11・16)は左から右下りの斜目、(14・17)は縦位の状態で施されている。(12・13)は口唇部に指頭圧痕文を押捺してある。

色調は白灰色(9・10・12・16)、赤褐色(11・14・18)、茶褐色(13・17)をそれぞれ呈している。全般的にその土器片にも大量の長石を含ませてあり、焼成は大体良好である。

第2節 石器 (図版7～8)

図版7の(1～8)は全て打製石斧であり、器形は(1～3)は短骨形、(4～8)は擦形の2種類に分類できる。石質は(6)は硬砂岩、(4)は緑泥岩、(1～3)(5・7～8)は砂岩であった。満足な状態で発見されたのは少なくて、(1・7)は下部欠損、(2・5)は上部欠損、その他は満足であった。

図版8の(1・3)は打製石斧、2は棒状石器、(4・7)は横刃形石器、(5～6)は磨石の3器種に分類できる。1は短骨形、3は撥形である。石質は(1・3～7)は硬砂岩、2は緑泥岩であった。1は上部欠損、3は上部欠損、5は下部欠損であった。

(飯塚政美)

第Ⅳ章 まとめ

末広六道原遺跡は、一般的に考えられている遺跡立地諸条件からすると存在性は希薄に思われ、発掘以前はおそらく、何も出土しないのではないかと思われた。あると推定するならば、わずかに沢が入っているので、その附近と思われた。

実際に発掘してみると、当初より期待していた以上に遺物が出土した。その遺物は土器片で考えてみると、縄文中期後葉の加曾利E式、縄文晚期土器片、水神平式であった。石器はそれに附属するものが多く、注目するものとして、弥生前期に位置づけられるものが多かった。

最後に、分布調査の結果、本調査をすることになったが、水神式の遺構発見が期待できると思われそうであろう。

(飯塚政美)

図 版



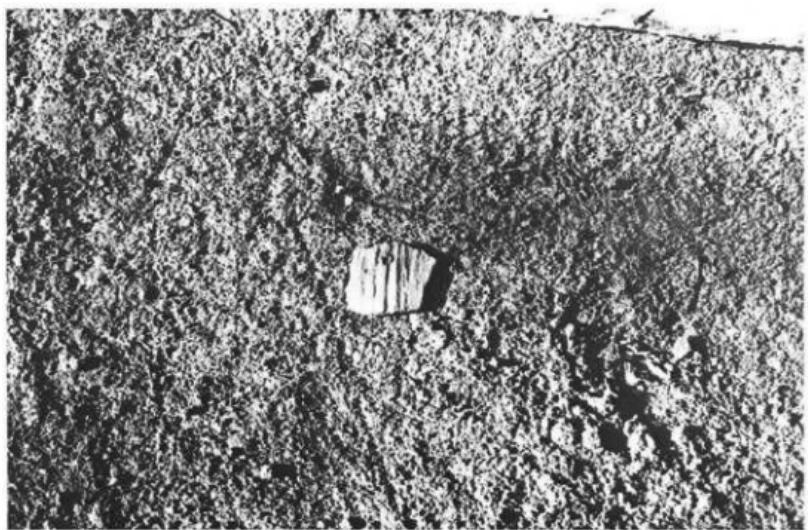
図版1 遺跡地遠望（南側より眺む）



図版2 遺跡地遠望（東側より眺む）



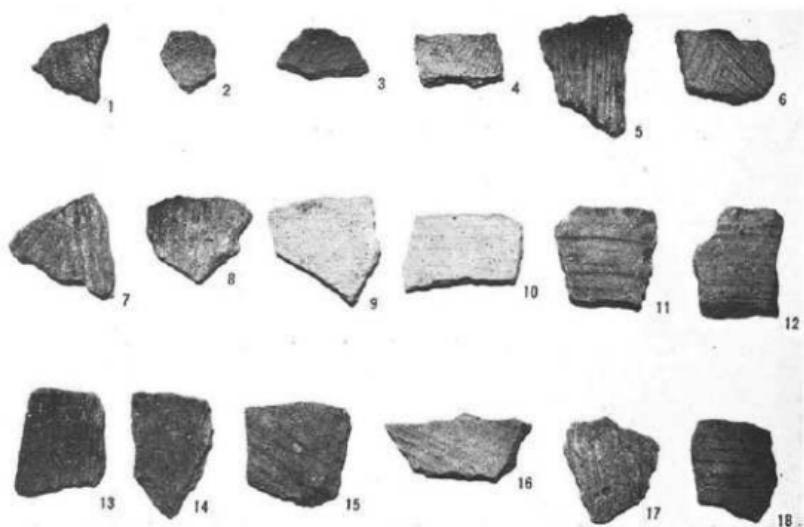
図版3 六道地蔵尊（北側より眺む）



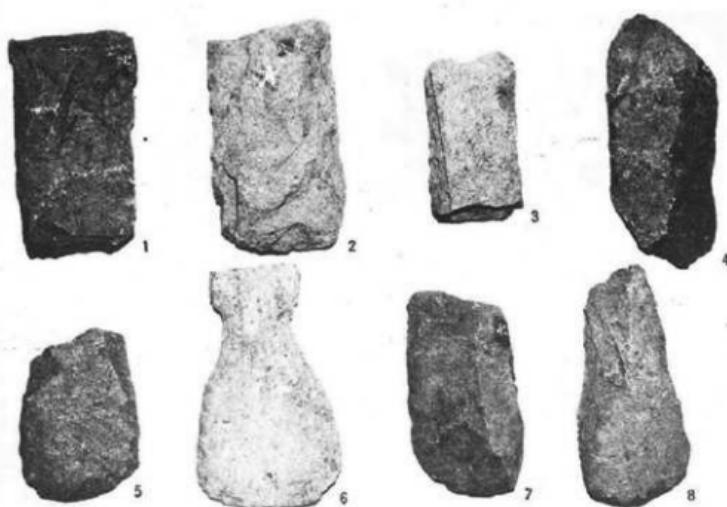
図版4 土器出土状況



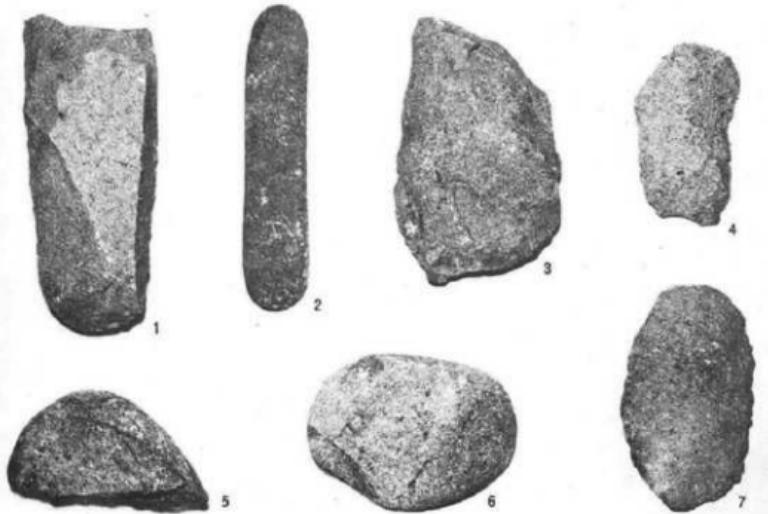
図版5 石器出土状況



図版6 出土土器



図版7 出 土 石 器



図版8 出 土 石 器

末広六道原遺跡

—分 布 調 査 概 報 —

昭和53年3月18日 印刷

昭和53年3月20日 発行

印刷所 長野県諏訪郡下諏訪町広瀬町
株式会社印刷

